

十屋 知洋

『英語コーパス研究』 第32号 (2025), pp. 85-104

一般的に、上記 (1) の用例が示すように (1c) の形容詞で修飾された若干のバリエーションは見られるものの、HAVE the advantage of の後ろには名詞句や動名詞を従える点で共通している。しかしながら、イギリス人ネイティブスピーカーは (3) の理由で、(1b) (1c) と同形式の動名詞を従える (2a) の英文は正しくなく、(2b) が正しいという。概略、形式的な文において、長所や強みを表すのであれば“能力”を表す can を含めたほうがより良いとして、(2b) の形式が適切だという主張である。

- (2) a. ? ... online classes *have the advantage of being taken* at any time.
 b. ... online classes *have the advantage that they can* be taken at any time.
 (3) I think the first version might be accepted in a casual email, but for exam purposes it is not correct. Because an advantage is being described, it is better to include “can”. (You can do this if you want.) Therefore I think the second version is correct.

ここで問題となるのが、本稿で焦点を当てる成句 HAVE the advantage of において、各種辞典や参考文献に名詞 advantage が前置詞 of の代わりに同格を表す that 節を従えることに触れるものが皆無に等しく、そもそもこの用法が可能なのか、更にイギリス人ネイティブスピーカーの指摘する同格節内に“能力”を表す助動詞 CAN が必要なのか、という2点である。本稿では、この2点の語法的問題について、成句として確立している HAVE the advantage of が従える語彙要素と比較しながら、その生起条件についても論じる。まず、第2節で数少ない先行研究を概観し、第3節と第4節でコーパスのデータに基づき量的・質的観点から実証的に分析する。そして、最終の第5節で分析結果の妥当性を確認すべくインフォーマント調査を行い、(2b) の用法の可能性を示すと共に助動詞 CAN の生起が同格 that 節内の命題の表す意味と密接に関係していることを実証する。

2. 先行研究

この第2節では、まず名詞 advantage が同格節を導くことが可能なのか、成句表現の of の正体を探りながら確認する。また、仮に同格の that 節を導くことが可能であれば、その同格節内に助動詞 CAN が必要なのかについても先行

研究を概観する。

2.1 advantage が従える同格 of

同格を表す後置修飾には、以下 (4) の 3 つのパターンが存在する。実際、Biber et al. (1999, p. 654) では、用例は示されていないが advantage を同格節の説明の一部で「抽象名詞 + of + ing」のリストに含めている。また、(5) の辞典では《◆ of は同格の of》と注付きで用例を上げている。

(4) [1] to-infinitive のみ容認

[2] to-infinitive と of + ing 共に容認

[3] of + ing のみ容認

(Quirk et al., 1985, pp. 1272-1274; 安藤, 2007, pp. 782-784)

(5) He *had the advantage* (over me) *of knowing* the language.

(G 大, 2001, “advantage”)

名詞 advantage が従える同格を表す後置修飾のパターンを the Corpus of Contemporary American English (以後, COCA; Davies, 2008-) と the British National Corpus (以後, BNC; Davies, 2004) で調べてみると、以下の表 1 に見られるように上述 (4) の [2] のパターンに該当し、特に HAVE the advantage of Ving の形が両コーパスから容易に検索される。²そして、(6) の事例からも of 以下が advantage (強み・長所) の内容を表しており、of が「同格」として機能しているといえる。尚、(6a) の文は、先に示したイギリス人ネイティブスピーカーが否定的に捉えている (2a) と同じ形式の実例である。

表 1. 名詞 advantage が従える同格を表す後置修飾の実態

	of Ving	to V
COCA	961 件	7 件
BNC	263 件	0 件

(6) a. …, he will *have the advantage of being elected* as a candidate of reform.

(COCA, Magazines)

b. A telephone call *has the advantage of giving* a personalised response, and yet is relatively inexpensive and not time consuming. (BNC, Written)

2.2 advantage が従える同格 that

一方, advantage が同格 that を従えるという記述は, 綿貫・ピーターセン (2006, p. 234) が「同格の that」を従える名詞として advantage をリストアップしているが, 辞典や参考文献で該当すると考えられる用例をあげているのは (7) に見られる程度である。

- (7) He *had the advantage over me that he could speak English.*

(ランダムハウス, 1973, “advantage”)

先行研究が少ないため, ここでは統語的振る舞いから advantage が同格用法の that を従える可能性を探る。2.1 節で触れたように advantage が同格 of を従えるという事実がある。一般に, 同格節を従える名詞は (8) のように BE 動詞で結ばれる論理関係にあるといわれる。実際, advantage もコーパスで同形式の用例 ((9) 参照) が検索される (COCA では 71 件, BNC では 11 件) ことから, 同格の that 節を従える可能性はあるといえる。事実, (9a) の advantage (長所) は, 必要な素材の量がとても少ないことであり, (9b) における強みは, たった 1 本の光ファイバーで適切なライトを作動するための全情報を伝達することができる, というので, それぞれ BE 動詞が従える that 節が長所や強みの内容を説明している。

- (8) The *possibility is that he will resign as ambassador.* (安井, 1996, p. 72)

- (9) a. There are many ways of making thin film cells; the *advantage is that the amount of material needed is very small and that reduces the cost.*

(COCA, Blog)

- b. The *advantage is that just one fibre can convey all the information to operate the correct lights.*

(BNC, Written)

2.3 HAVE the advantage that 節内における助動詞 CAN の必要性

2.2 節で advantage が同格の that 節を従える可能性について触れた。この同格を表す that 節内に助動詞 CAN が必要かどうかという先行研究はないが, 辞典には (10) のような could を含む用例が見られる。また, (11) の WordbanksOnline (以後, 小学館 WB・WB; Harper Collins Publishers in Shogakukan Corpus Network, n.d.; Harper Collins Publishers, n.d.) の検索例を確認された

い。³ コーパスでは成句 HAVE the advantage of に続く形として, CAN と類義の「内在的能力」「状況的能力」を表す being able to V を検索するのは難しくなく, “能力” という意味要素を従える可能性が観察される。⁴ 第 3 節以降で詳細に分析するが, 確かに (12) のように同格の that 節内に can が共起する実例が見られる。

(10) He *had the advantage over me that he could speak English.* (= (7))

(11) He *has the advantage of being able to play in several forward roles.*
(小学館 WB, UK, Written)

(12) They (= Acrylic varnishes) are very quick drying, with a low odour, and *have the advantage that the brushes can be cleaned with water.* (BNC, Written)

先行研究と上述の実態を踏まえ, 次節から成句 HAVE the advantage of と比較しながら, 以下 2 点の実態について実証的に調査していく。

- (13) a. HAVE the advantage が同格の that 節を従える可能性
- b. 従える同格 that 節内の助動詞 CAN の必要性和その有無の要因

3. 量的調査

本節では, HAVE the advantage の後にどのような形式が来るのか, また同格 that 節がどのような頻度で生起するのか, その実態を数値から調査する。

3.1 HAVE the advantage of Ving の V の種類

成句として HAVE the advantage に同格 of が後続する形が無標といえるため, 同格 of に続く動詞の種類を確認し, “能力” の意味につながる表現が生起するのか頻度面から調査する。

コーパスでは, (14) から (17) の各実例の下線に含まれるように of に後続する動詞の種類は多岐に渡り, being が最も多く, 完了の having, 状態動詞の knowing, 動作動詞 allowing や reading などの頻度が高いといえる。

(14) a. Dana Perino *has the advantage of being an attractive female.*
(COCA, Blog)

b. Made of carbon, these cells *have the advantage of being produced at low*

- cost … . (COCA, Newspapers)
- c. They have the advantage of being able to gain the trust of other residents, … . (COCA, Newspapers)
- (15) I also had the advantage of having gone to an experimental progressive school … . (COCA, TV/Movies)
- (16) … George W. Bush will have the advantage of knowing these lessons from the past. (COCA, Magazines)
- (17) a. Training of this type has the advantage of allowing us to share knowledge with a group of people at once, … . (COCA, Academic)
- b. My Lords, I have had the advantage of reading in draft the speech prepared by my noble and learned friend, Lord Bridge of Harwich. (BNC, Written)

以下の表 1-1 と表 1-2 の COCA, BNC, WB の調査から、共通して being を従える用例が他の動詞を含む用例に比べ圧倒的に多いことが分かる。その being に続く形式を精査してみると、最も頻度が高いのが (14a) のような名詞句や形容詞が後続するパターンであり、次いで (14b) の受動態と本稿で探っている「内在的能力」「状況的能力」を表す (14c) の able to V で、able to V の出現率は全体で約 20% であることが分かった。また、レジスターの相違から比較すると、HAVE the advantage of が書き言葉の表現であること、英米差は見られないことが明らかとなった。

表 1-1. COCA 及び BNC における HAVE the advantage of Ving の V の種類

	COCA				BNC			
順位	件数	V の種類	being + α		件数	V の種類	being + α	
1	246 (1)	being	名 / 形	150	88 (1)	being	名 / 形	54 (1)
2	44	having	受動	37	34	reading	受動	16
3	25	allowing	able to	36(1)	9	providing	able to	12
4	19	knowing	存在	23	9	making	存在	6
5	11	providing			8	having		

注：太字は他コーパスでも検索された動詞を表示。

：表中()の数値は話し言葉の件数。

：網掛けは本稿でターゲットにしている意味表現 (able to V)。表 1-2 も同様。

表 1-2. WB における HAVE the advantage of Ving の V の種類

順位	件数	V の種類	US : being + α		件数	V の種類	UK : being + α	
1	36(2)	being	名 / 形	25(2)	99(7)	being	名 / 形	57(6)
2	8	having	able to	7	20	having	able to	21
3	4	knowing	受動	4	9	knowing	受動	15(1)
4	3	allowing			5	playing	存在	6

また, being able to に後続する動詞の種類は, 以下の表 2 に示す動作動詞となるが, そのバリエーションは多岐に渡る。その一例が, (18) の include を含む事例である。

表 2. being able to に後続する動詞の種類

順位	COCA : 36 件		BNC : 12 件		WB の US と [UK] : 28 件	
1	use	2(1)	use	1	[tap]	2
2	operate	2	operate	1	[work]	1
3	look (at)	2	offer	1	examine	1
4	jump-(start)	2	include	1	[look (at)]	1
5	include	1	snatch	1	[use]	1

注 : 各コーパスにおける総件数と表中の個々の動詞の合計件数が一致しないのは, 各コーパスの上位 5 つの動詞のみを掲載しているため。

: 太字は他コーパスでも検索された動詞, () の数は話し言葉の件数を表示。

: WB の欄に見られる [] はイギリス英語から検索された動詞を表示。

- (18) These experiments *have the advantage of* being able to include service attributes that have not been offered in real-world markets, ... (COCA, Academic)

3.2 HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' の可能性

既に 2.2 節と 2.3 節で概観したように, 先行研究に名詞 advantage が同格の that 節を従える可能性と CAN の必要性を記述したものは極めて少ない。しかしながら, 各コーパスからは同格の that 節を従える事例や同格の that 節内に CAN が生起する事例が検索される。(19) では, 地元の組織ならではの協力体制がすぐに生まれるという強みを that の同格節で説明している。興味深いのは, 話し言葉のデータである用例 (20) である。一度, has the advantage of と言い, of を that 節に言い換えていることから, 前置詞 of とこの that 節が共に「同格」

として *advantage* の内容を説明する機能を果たしていることの例証になるといえる。(21) は、同格を表す *that* 節内に *can* を従える用例で、各用例は風力発電の24時間稼働し続ける“能力”の高さやIDが複数の銀行で利用“可能”な長所を表している。

- (19) Local organizations *had the advantage that* cooperation came about quickly because people knew and trusted one another. (COCA, Academic)
- (20) Making a will with a solicitor also *has the advantage of that* you'll have a copy, he's likely to look after it for you if you want him to. (BNC, Spoken)
- (21) a. Wind generators also *have the advantage that* they can go on working 24 hours a day, where solar panels can only operate in sunlight.
(BNC, Written)
- b. ID card *has the advantage that* it can be used with more than one bank.
(小学館 WB, UK, Written)

数値面を詳しく見てみると、以下の表3が示すようにCOCAでは、同格の *that* 節を従える83件の内20件がCANと共起し(CANを従える割合は約25%)、BNCでは95件の内16件がCANをとる形式(約17%)であった。WBのイギリス英語では、同格を表す *that* 節を従える57件中18件(約30%)でCANと共起し、その内の7件が話し言葉であった。WBのアメリカ英語では、19件の同格節のうち5件(約20%)がCANを節内にとる用例であった。3つのコーパスで検索されたCANが生起する件数からは、イギリス英語で使用される傾向があるように見えるが、英米差はほとんど見られない。実際、石川(2008, pp. 83-97)を参考にカイ二乗検定にかけると英米差で有意差は確認されなかった。⁵ コーパスのデータでは英米差に関して有意差が見られなかったため、第5節のインフォーマントの反応も見ながら再確認していくことにする。英米間での明らかな使用頻度差は見られなかったが、HAVE the advantage が同格の *that* 節を従えること、その節内にCANを従える形式は英米問わず書き言葉で主に利用される傾向にあること、イギリス英語では話し言葉でも使用されることが明らかになったことは注目すべき点である。

表 3. HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' の実態

	COCA	BNC	WB [UK]	WB [US]
同格 that 節	83	95 (2)	57 (14)	19
+ CAN	20	16 (1)	18 (7)	5

注：[UK][US]はイギリス英語とアメリカ英語，()の数は話し言葉の件数を表示。

更に，“能力”を表す CAN と共起する動詞を精査してみると，表 4 が示す通り，受動や能動といった態の違いに関わらず，先に見た being able to と同様に動作動詞であることが分かる。

表 4. COCA : HAVE + the advantage that S' + CAN + V' における V' の種類

受動 be +	seen	used	not called	represented	estimated	changed	
能動	adapt	make	stimulate	fabricate	summarize	examine	identify
	provide	evaluate	take out	respond to	get out		

3.3 量的調査のまとめ

ここまでの量的調査から，以下 3 点を実証することができたと考える。1 つ目 ((22a)) は，両表現とも動作動詞を従え書き言葉で利用される傾向にあるということである。2 つ目 ((22b)) に，本研究がターゲットとする HAVE the advantage of being able to V / that S' + CAN + V' の両形式の出現率に英米差はなく，イギリス英語では話し言葉でも利用される傾向があるということである。3 つ目 ((22c)) として，同格 that を従える節の内，“能力”を表す CAN が生起する割合は約 25% に過ぎず，必ずしも advantage (強み・長所) にとって必要不可欠な意味要素ではないということである。

- (22) a. HAVE the advantage of being able to V / that S' + CAN + V' の両表現とも動作動詞を従え書き言葉で利用傾向
- b. HAVE the advantage of being able to V / that S' + CAN + V' の両表現の頻度に英米差はなく，イギリス英語では話し言葉でも利用傾向
- c. HAVE the advantage が同格の that 節を従える事例の内，that S' + CAN + V' のパタンの出現率は約 25% で，助動詞 CAN は advantage にとって任意要素

確かに、先行研究では触れられていない HAVE the advantage が従える同格 that の節内に“能力”を表す助動詞 CAN が生じることが実例から明らかとなり、本稿の冒頭で触れたイギリス人ネイティブスピーカーの指摘が正しい側面もある。しかしながら、同格の that 節内における CAN の出現率を確認すると、必須要素とは言えず、ネイティブスピーカーの直観と言語実態が必ずしも一致していないことも分かる。では、どのような要因が同格の that 節内に CAN を生起させるのか、また比較対象の類義表現 being able to V がなぜ生じるのか、について次節で実例を 1 つ 1 つ検討しながら論じていく。

4. 質的調査

4.1 HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' の生起条件

以下 (23) は、HAVE the advantage that S' + V' の形式の実例である。(23a) は、波線部の often contain (よく～を含んでいる) という表現からも習慣かつ状態を表すのは明らかで“能力”の意味とは共起しないと考える。(23b) では、同格節内の動詞の形から Herman の常日頃の話し方について述べており、(23c) も外付けのドライブであれば普通はコンピューターの故障や不慮な事故で影響は受けない、と共に習慣や状態を表す内容であることから、“能力”を表す CAN を特に表現する必要はない。(24) はどうであろうか。(24) の命題内容は、波線部 came about が「(予想外のことが) 起こる・生じる」と制御できない事象の発生を表し、能力とは関係ないことに加え、地元の人々がお互いを知り信頼し合っているため習慣的に協力体制が生まれていると考えることができる。いずれにせよ、能力と無関係であり習慣とも読み取れることから、(23) の各例と同様に CAN を用いる場面ではないと説明できる。

- (23) a. Old photos and videos *have the advantage that they often contain little gems that you had entirely forgotten about.* (COCA, Web)
- b. HUCKABEE: Herman Cain does *have the advantage that* he talks the language of people who understand that he's talking to them and he's talking for them.
O'REILLY: He's a good communicator. (COCA, Spoken)
- c. External drives also *have the advantage that* they usually are not affected by computer crashes and other mishaps; ... (COCA, Web)

- (24) Local organizations *had the advantage that cooperation came about quickly*
because people knew and trusted one another. (= (19))

一方、次に示す (25) の用例は、HAVE the advantage that S' + CAN + V' の形式、つまり“能力”を要求する実例である。(25a)は、主題の風力発電が、波線部で示す日が当たっている時間帯でのみ機能する太陽光パネルと比較することで、1日24時間稼働し続ける能力という強みについて述べられている。(25b)も、人間と比べて機械には新しい環境に即座に適応することができるという長所を示している。この2つの用例には、共通して主語が元来保有する“内在的能力”の意味が他の事象と比較され焦点化されており、それを can で表現しているといえる。

- (25) a. Wind generators also *have the advantage that they can go on working 24*
hours a day, where *solar panels can only operate in sunlight*. (= (21a))
b. *Machines do have the advantage that they can within a geologic instant*
adapt to a new environment. (COCA, Web)

では、以下 (26) に含まれる助動詞 can の意味はどうか。(26a)の内容は、アクリルニスの特徴を説明したもので、アクリルニスであればブラシの汚れが水できれいになるという長所がある、という。(26b)は、ソフトウェアモデルを利用すれば必要なほどモデルを複雑にすることができるというソフトウェアモデルの長所を述べている。先の (25) の用例と異なり、(26)の2例は、長所を持つ主語と that 節内の命題の主語が異なることから、内在的能力ではなく、強みや長所を有している事物の状況的能力を表していると考ええる。

- (26) a. They (= Acrylic varnishes) are very quick drying, with a low odour, and
have the advantage that the brushes can be cleaned with water. (= (12))
b. Software models *have the advantage that you can make the models as*
complex as you need to, ... (COCA, Blog)

上述のように、HAVE the advantage that に後続する節内に助動詞 CAN が生じ
するかどうかは、名詞 advantage の意味が引き出しているのではなく、むしろ
節内の命題内容に起因していると考ええる。つまり、同格節内の主語が他のもの

と比較して能力を明示する場合や強調する場合、また状況的により能力が発揮されることを示す場合に CAN を必要とするのである。

4.2 HAVE the advantage of Ving か being able to V の選択

類似した意味で利用される HAVE the advantage of being able to V の生起条件が何なのか確認してみる。(27) の各用例には同じ動詞 play が用いられている。(27a) の例は、HAVE the advantage of Ving の形式で、将来有望なバスケットボールの Price 選手が強力なポイントガードである Brown 選手と常日頃から一緒にプレーしている利点を示している。一方、HAVE the advantage of being able to V の形式で表現されている (27b) は、フットボール選手である主語 He が他の選手と比べ、フォワードのポジションにおいて様々な役割 (ポストプレーなど) でプレーできるという強みを持っている、という内容である。この2例に見られる大きな違いは、習慣的な行為なのか他者と比べて能力の違いを強調しているかという点で、前者の意味では“能力”を必要とせず、後者の意味では being able to で表現されるのがより自然といえる。これは、4.1 節で論じた HAVE the advantage が従える同格節 that 内の助動詞 CAN の有無と同じ規則で説明できると考える。

- (27) a. Price has a bright future as a player and *has the advantage of playing with Brown*, a strong point guard. (COCA, Newspapers)
- b. ... he is very professional, a charming man and a good guy to have as a team-mate. He *has the advantage of being able to play* in several forward roles. (小学館 WB, UK, Written)

もう少し実例を探してみる。(28a) はロシア語を話す強みについて述べている。この用例では一見、「ロシア語を話すことができるという強み」と解釈でき、being able to speak Russian とした方が良さそうだが、Swan (2005, p. 106) が示す通り、動詞 speak や play は助動詞 CAN なしでも能力を表すことができるため、ここでは being able to を特に明記する必要はない。(28b) では、下線が示す動詞 know が状態動詞のため、能力を表す can とは共起せず、(28c) では、「視覚に入ってくる」という無意識的な知覚を表す動詞 see が用いられており、(28b) と同じ説明が適用できる。ダーウィンには鳥たちが何を食べていたのか目にしたといった利点³ (当時は) あったが⁴、包括した進化の概念は化石記録

の研究に基づいている、という解釈となり、see が状態的な動詞の役割を果たしていることから、“能力”の意味とは結びつかないと考える。

- (28) a. For instance, if one says to them, you at least *have the advantage of speaking* Russian and this entitles you to a certain authority in the area of Eastern European art, … . (BNC, Written)
- b. … George W. Bush will *have the advantage of knowing* these lessons from the past. (= (16))
- c. Darwin *had the advantage of seeing* what the birds ate, but the whole evolution concept is grounded in the study of fossil records. (COCA, Blog)

4.3 質的調査のまとめ

本節では、コーパスの実例から、主に HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' のパターンに焦点を当てて、成句表現 HAVE the advantage of Ving / being able to V とも比較分析しながら助動詞 CAN と共起する要因を探ってきた。その分析結果は、(29) の3点に集約することができる。助動詞 CAN そして being able to V が HAVE the advantage that / of に続く要因の根底には、命題中に他の事象と相対的な主題の能力（内在的能力）の明示・強調や能力が発揮される状況（状況的能力）といった要素が存在している。逆に、習慣的な行為や状態を表す動詞では、助動詞 CAN や being able to V といった表現と共起しないのは至極当然だといえる。

- (29) a. HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' と HAVE the advantage of Ving / being able to V のパターンの選択は共に同じルールが適用可能
- b. 他の事象との比較による能力の明示・強調や状況的能力の発揮を表現する場合に CAN や being able to と共起傾向
- c. 習慣的な行為・状態動詞（相当）の場合には助動詞 CAN 及び being able to と共起しない傾向

5. インフォーマント調査

5.1 調査方法の概要と予測

これまでの量的・質的調査結果の妥当性を確認するため、インフォーマント

調査（アメリカ英語：アメリカ人3名とカナダ人1名・イギリス英語：イギリス人6名の計10名）を行った。(30) から (32) の用例は、コーパスを参考に著者が加工して作成した質問文である。各質問文の後ろには、これまでの調査結果に基づいた著者の予測が示され、調査結果は表5に示されている。調査方法は、各質問文に対して、被検者であるネイティブスピーカーが、容認できる場合は○、容認できない場合には×、そして、容認できないわけではないが不自然さを感じる場合に△、という3つの記号（選択肢）で回答した。

各質問文には調査から得られた意図が含まれており、著者の予測はそれに基づいてなされている。例えば、(30) の質問文は、冒頭の Compared with face-to-face classes という他の授業を比較して online classes の長所を強調している点で being able to V と同格の that 節内に助動詞 CAN が共起している文の容認度が上がると推測される。また、(30a) と (30c) における予測の相違は量的調査の頻度（Ving / being と that 節の件数）に基づいている。一方、(31) の質問文には contain という状態動詞を利用している点で“能力”を表す表現とは共起しないため、(30) とは正反対の結果、つまり begin able to と can が含まれていない文の容認度が上ると予測した。そして、(32) は理由を明示する because 節を伴うことで、海外勤務の能力を有するという強みを表しているため、begin able to 及び can を用いた文の容認度が上ることを想定した。

- (30) a. Compared with face-to-face classes, online classes have the advantage of being taken at any time. 著者の予測：△
 b. Compared with face-to-face classes, online classes have the advantage of being able to be taken at any time. 著者の予測：○
 c. Compared with face-to-face classes, online classes have the advantage that they are taken at any time. 著者の予測：×
 d. Compared with face-to-face classes, online classes have the advantage that they can be taken at any time. 著者の予測：○
- (31) a. Old albums have the advantage of containing little gems that you had entirely forgotten about. 著者の予測：○
 b. Old albums have the advantage of being able to contain little gems that you had entirely forgotten about. 著者の予測：×
 c. Old albums have the advantage that they often contain little gems that you had entirely forgotten about. 著者の予測：○

- d. Old albums have the advantage that they can often contain little gems that you had entirely forgotten about. 著者の予測：×
- (32) a. They have the advantage of working overseas because they speak English fluently. 著者の予測：△
- b. They have the advantage of being able to work overseas because they speak English fluently. 著者の予測：○
- c. They have the advantage that they work overseas because they speak English fluently. 著者の予測：×
- d. They have the advantage that they can work overseas because they speak English fluently. 著者の予測：○

5.2 回答結果

各質問文を参照しながら、回答結果と著者の予測について分析していく。まず、比較対象を示して online classes の長所を強調している (30) の各質問文では、被験者の回答は著者の予測から大きく外れるものではなかったが、HAVE the advantage of に続く Ving か being able to V かの容認度は質的調査結果と一致しなかった。予測に反し (30a) の HAVE the advantage of being taken の形式における容認度が高く、対面授業と比較はしているものの (30b) の HAVE the advantage of being able to be taken を不自然とする回答が多かった。⁶ ネイティブスピーカーのコメントには、begin able to be taken の表現の長さや時制の複雑さに不自然さを感じるとの指摘が見られた。興味深いことに、イギリス英語では HAVE the advantage of に Ving が後続する形式は容認されるのに対し、その言い換えとも言える同格の that 節に従える (30c) の HAVE the advantage that S' + V' の形式では 6 人中 5 人が非容認と回答した。同様に、HAVE the advantage that S' + CAN + V' の形式は容認傾向にあるのに対して、HAVE the advantage of being able to V では不自然とする回答が増えており、インフォーマントによる指摘の通り、意味だけでなく構造などの問題点も考慮する必要があるというインフォーマント調査の今後の課題と言える。

状態動詞を利用した (31)、そして理由を明示した (32) の質問文へのネイティブスピーカーの反応は、これまでの調査結果から著者が予測したものとはほぼ一致するものであった。状態動詞 contain を含む質問文 (31) では、“能力”を表す表現を含む (31b) 及び (31d) で容認度が低かった。一方、(31a) と (31c) の“能力”を示さない文は容認傾向にあるが、僅かながら同格の that 節に従え

る用法に不自然さを感じる傾向が英米共に垣間見える結果となった。(32)の質問文では、理由を明記することにより海外で仕事ができるという“能力”の高さを際立たせており、being able to と can を含む英文の容認度が明らかに高いといえる。特に、(32c) と (32d) の同格節を従える両質問文における容認度の差は顕著であり、意味と形式の選択が密接に結びついていることが分かる。

表 5. インフォーマント調査の結果

設問		a	b	c	d
(30)	米	2-1-1	1-3-0	0-2-2	3-0-1
	英	4-2-0	2-3-1	1-0-5	4-0-2
(31)	米	3-1-0	0-1-3	2-1-1	1-1-2
	英	4-0-2	0-4-2	3-1-2	2-1-3
(32)	米	1-2-1	4-0-0	0-3-1	3-1-0
	英	4-1-1	5-0-1	0-0-6	4-2-0

注：表中の数値は、容認[○]—不自然[△]—非容認[×]、の順で提示。

：「米」「英」はそれぞれ「アメリカ英語」「イギリス英語」のインフォーマントを表示。

5.3 インフォーマント調査のまとめ

本節では、インフォーマントの反応を調査することにより、第3節の量的調査と第4節の質的調査で分析した結果の妥当性を確認し、以下(33)に示す3点にまとめることができると考える。1つ目は、文構造や時制の複雑さとの関係について更なる調査が必要だが、(30)の設問以外では、英米共に HAVE the advantage of の形式より同格の that 節を従える形式自体、容認度が下がる傾向にあり、量的調査の傾向に類似した結果であった。2つ目は、名詞 advantage が必ずしも“能力”の意味を引き出しているわけではなく、むしろ対象物と比較することで主題が行う“能力”の高さを明示・強調する場合や理由等を提示し、ある状況下で能力が発揮される場合に、being able to V や同格 that 節内に CAN を用いる傾向にあることが再確認できた。3つ目は、状態動詞や習慣を表す場面(動詞)では、“能力”を表す表現とは共起しないという傾向がはっきりと表れ、(33b)同様、質的な分析結果の妥当性を裏付けるものとなった。

- (33) a. 英米共に HAVE the advantage of より同格の that 節を従える形式で容認度が下がる傾向があり、量的調査の結果と類似
 b. 他の事象と比較すること、また命題内容に対する理由を提示するこ

- とで, “能力” の高さや状況的能力を明示する場合, HAVE the advantage が of being able to V や that S' + CAN + V' の形式と共起傾向
- c. 状態動詞や習慣的な長所や強みを表す場合, HAVE the advantage に続く表現は Ving や that S' + V' の形式で, “能力” の表現を明示すると容認度が下がる傾向

6. 結語

本稿では, コーパスをデータを中心に据えた実証的なアプローチで, 既存の成句 HAVE the advantage of Ving と比較しながら, これまで扱われることのなかった名詞 advantage が同格の that 節に従えることが可能なのか, 更に同格節内に “能力” を表す助動詞 CAN が必須要素なのか論じてきた。結論として, HAVE the advantage that S' + CAN + V' の形式は英米共に主に書き言葉で利用されるが, イギリス英語では話し言葉でも利用され, アメリカ英語と比べより広いレジスターで利用されている傾向にあることが明らかになり, 本稿冒頭で触れたイギリス人ネイティブスピーカーから指摘があったことも合点がいく。しかしながら, 同格の that 節内に生起する助動詞 CAN は, 決して advantage の意味が引き出しているわけではなく, of や that が従える命題内容に依存していることを実例を見ながら実証した。そして, インフォーマント調査でも分析結果の妥当性がある程度認められたように, “内在的能力” “状況的能力” を明示・強調する際に, “能力” を表現する CAN や類義の being able to が生起するというメカニズムが根底にあることが明らかとなった。つまり, 助動詞 CAN は advantage の必須要素ではなく, 同格節内の命題内容に依存しているのである。

本稿で明らかにした HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' という新たな知見(表現)は, これまで文献や辞典にも詳細な記述がなされていないことから, 言語実態をより正確に反映した記述を辞典に提供できる点で貢献できる。今後, 本研究結果を基盤に, merit, benefit, strong point などの advantage の類語も同じパターンに従えることが可能なのか, 更に調査と分析を進め, 意味と形式の関係性やそこに働く原理を更に探っていきたいと考える。

注

* 本稿の執筆に際し, 特に形式面と統計面で大変貴重なご指摘とご助言を賜りました

査読委員の先生方に心より感謝申し上げます。また、2024年10月5日に青山学院大学で開催された第50回大会の口頭発表において、フロアから貴重なご意見を下さった京都外国語大学名誉教授の赤野一郎先生にも感謝の意を記します。尚、未だに残る不備な点は全て著者の責任である。

1. 本稿で HAVE the advantage of ... の HAVE を大文字で表記しているのは、人称と数の一致や過去時制による have, has, had を全て含むことを表している。また、CAN も can 及び could を含むことを示し、BE 動詞も同様である。
2. Advantage (長所・強み) の内容を説明する同格の後置修飾のパタンには、コーパスによる検索数は非常に少ないが、HAVE the advantage to V という to V の形式も存在する。この形式も先行研究では触れられておらず、HAVE the advantage of Ving と HAVE the advantage to V の意味の違いについても興味深いので別の機会に調査したいと考える。
3. 本稿の調査では、厳密に言うと2種類のインタフェースで WB を利用した。1つは、2024年3月まで提供されていた小学館コーパスネットワークを介して利用した WB、もう1つは2025年2月から利用を開始した Harper Collins Publishers が提供しているオンラインプラットフォームの Sketch Engine 内で検索した WB である。検索結果から、両者は収録語数だけでなく収録されている用例も異なるため、本稿では出典として前者を“小学館 WB”、後者を“WB”という形で区別した。本稿で提示している用例の多くは前者から、表1-2、表2及び表3のデータは後者からのものである。
4. 本稿で述べる“内在的能力”と“状況的能力”の CAN とは、一般的に“能力 (ability)”と“状況的可能性 (circumstantial possibility)”と定義されるもので、以下の相違が見られる：

[1] I can speak a little Italian. 能力 (安藤, 2005, p. 275)

[2] You can speak English tomorrow / here. 状況的可能性 (本稿の状況的能力)

(安藤, 2005, p. 278NB1)

[3] I can swim, but today I can't because the sea is rough. (G6, 2022, “can”)

上記 [3] の用例では、前半が“内在的能力”、後半が“状況的可能性”を表す CAN の用法である。類義の BE able to にも上記の両用法が同様に存在する。

尚、研究当初、本稿で議論してきた助動詞 CAN の意味を先行研究に基づき“能力”と“可能”（状況的可能性）として捉えていた。しかし、類義表現である BE able to の形容詞 able の原義との整合性を図り、後者の意味が、“ある状況下”において advantage (強み・長所) を持つ“事象の能力”が発揮されるかどうかで多くの用例を捉えることが可能なため、本稿では“状況的能力”の用語を用いて論じることとする。

5. 表3の「HAVE the advantage that S' + (CAN) + V' の実態」に関して、小学館コーパスネットワークが提供する小学館 WB が2024年3月末でシステムの提供が終了し、

審査段階で検索ができていなかったため、WB [UK] と [US] の同格 that 節の件数が“未確認”と表記されていた。しかしながら、英米差を含めより正確なデータを掲載できるよう Harper Collins Publishers が提供している WB で調査してそのデータを追加して修正した。また、査読委員の先生より、COCA と BNC における同格の that 節内に CAN が生起する形式に関して、カイ二乗検定にかけると英米差に有意差は確認できないとのコメントを頂いた。そのため、WB を新たに含めた 3 つのコーパスで上述の形式における英米差をカイ二乗検定にかけて再調査した。より正確な実態を提示する貴重なきっかけを与えて下さった査読委員の先生方に感謝申し上げます。

6. (30a) は、本稿の冒頭でイギリス人ネイティブスピーカーに指摘を受けた用例 ((2a)) と同じ構造の文である。4 名のイギリス人が容認している通り、個人差も影響するインフォーマント調査の難しさを感じる。文構造を含め、今後、更に調査を継続していく必要がある。

参考文献

安藤貞雄. (2007). 現代英文法講義. 開拓社.

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.

Davies, M. (2004). *The British National Corpus (BNC)* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/> 2023 年 6 月～2025 年 2 月アクセス

Davies, M. (2008-). *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/> 2023 年 6 月～2025 年 2 月アクセス

Harper Collins Publishers. (n.d.). *WordbanksOnline (WB)*. Available online at <https://wordbanks.harpercollins.co.uk/> 2025 年 2 月アクセス

Harper Collins Publishers. (n.d.). 小学館 *WordbanksOnline* (小学館 WB). In Shogakukan Corpus Network. <https://scnweb.japanknowledge.com/> 2023 年 6 月～2024 年 3 月アクセス

井上永幸・赤野一郎 (編). (2018). ウィズダム英和辞典 (第 4 版). 三省堂. (W4)

石川慎一郎. (2008). 英語コーパスと言語教育. 大修館書店.

小西友七・南出康世 (編). (2001). ジーニアス英和大辞典. 大修館書店. (G 大)

Lea, D., & Bradbery, J. (Eds.). (2020). *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (10th ed.). Oxford University Press. (OALD10)

南出康世・中邑光男 (編). (2022). ジーニアス英和辞典 (第 6 版). 大修館書店. (G6)

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Rundell, M (Ed.). (2007). *Macmillan English Dictionary* (2nd ed.). Macmillan Publishing. (MED2)

小学館 (編). (1973). ランダムハウス英和大辞典. 小学館. (ランダムハウス)

Swan, M. (2005). *Practical English Usage*. Oxford University Press.

綿貫陽・マークピーターセン. (2006). 実践ロイヤル英文法. 旺文社.

安井稔. (1996). コンサイス英文法辞典. 三省堂.

(土屋 知洋 芝浦工業大学 E-mail: tomotsu@shibaura-it.ac.jp)